

# 山城地域における円筒棺

北 山 大 熙

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 山城地域における円筒棺

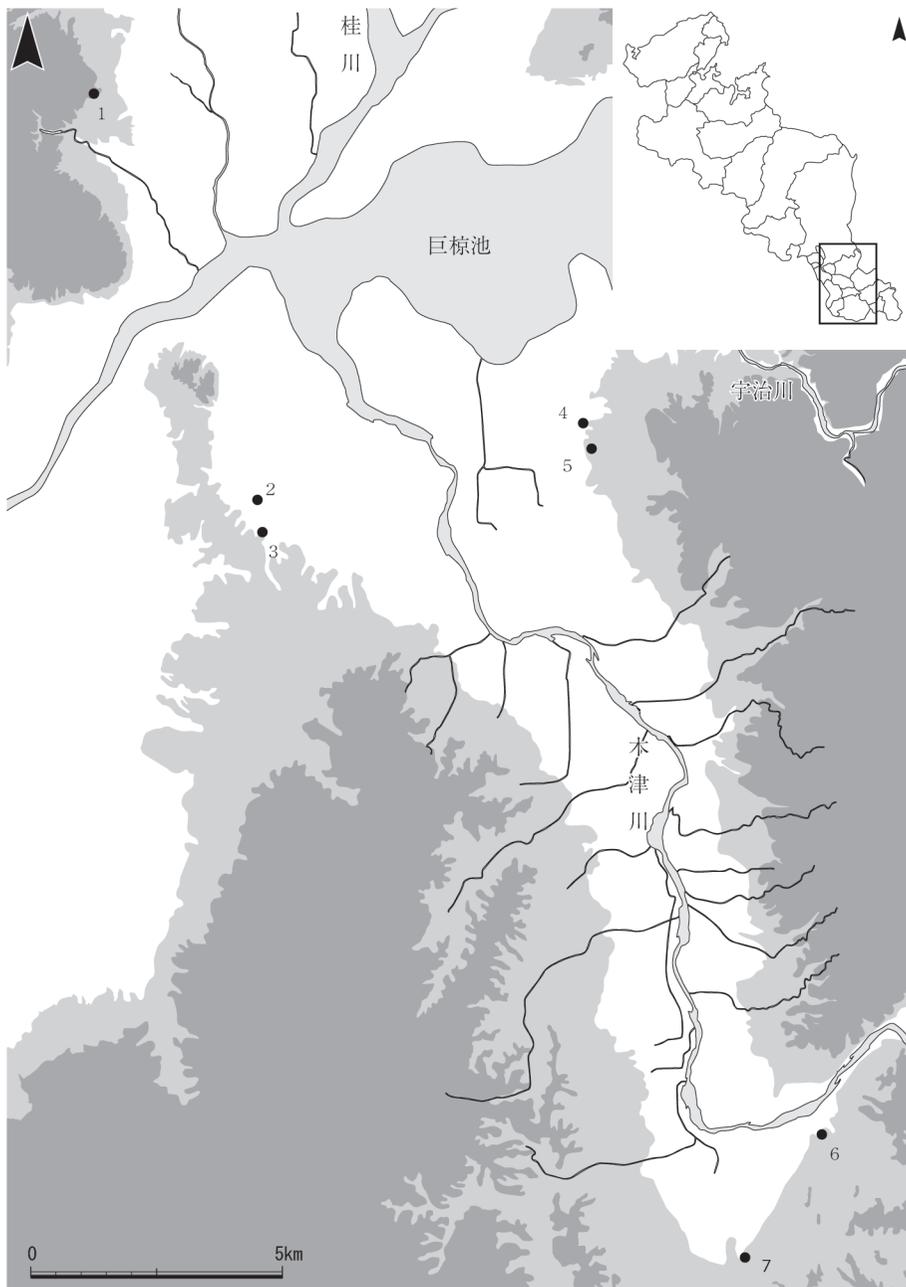
北山大熙

## 1. はじめに

古墳時代、様々な材質の棺が全国で用いられ、その中でも本来、古墳に樹立する埴輪を用いた埴輪棺や製作技法などが類似する専用棺として作られる円筒棺<sup>(注1)</sup>が、全国各地で確認されている。特に円筒棺は近畿地域を中心に出土しており、山城地域でも出土が確認できる。近年、山城地域を中心に円筒棺について新例や詳細な報告を行うことができたため、本論では、これまで着目されることの少なかった円筒棺の詳細な分析をもとに、円筒棺の製作集団の内情を明らかにする。

## 2. 研究史

埴輪を棺として事例して紹介したものは、1921年の上原準一が香川県山崎出土事例を紹介したものまで遡る。当時においては、九州の甕棺との関係性を想定し、朝鮮半島の系譜を引くものとして位置づけている<sup>(注2)</sup>。1923年に、梅原末治は大阪府藤井寺市沢田出土事例を紹介し、「円筒棺」という用語を用いた<sup>(注3)</sup>。1957年には、後藤守一が、円筒埴輪を転用した棺と特別に製作したものがあつたことを指摘し、これまでの甕棺の系譜とする考えから切り離して、議論されるようになる<sup>(注4)</sup>。1958年には、間壁忠彦は資料集成を行い、初めから棺として作られたものを「特製円筒棺」、円筒埴輪を使用したものを「ハニワ利用の円筒棺」、それらを合わせて「円筒棺」と呼称する<sup>(注5)</sup>。1962年に、伊達宗泰は、佐紀丘陵に多く分布する円筒棺や埴輪棺について分析し、被葬者を土師に関わる特定集団として指摘する<sup>(注6)</sup>。1980年になると、橋本博文によって円筒棺、埴輪棺の全国的な集成が行われる。分布の傾向、棺形態、出土位置から起源や被葬者の地位・性格といった部分を検討し、土師伝承地との関係について考察する。氏による研究は、現在の円筒棺・埴輪棺研究の基礎となつてい<sup>(注7)</sup>る。1994年からは、多くの研究者によって埴輪棺や円筒棺の被葬者に関する研究が行われ、それぞれの円筒棺が出土位置や副葬品にまとまりがなく、多様性をもつことが指摘される<sup>(注8)</sup>。2000年には、川口修実によって再度全国集成が行われ、古墳時代前期から後期への埴輪棺と円筒棺の展開について考察される<sup>(注9)</sup>。氏は、円筒棺の起源を埴輪棺と考え、中期前半に出現し、その後、陶棺へと変化していくと位置づけられている。近年の研究では、地

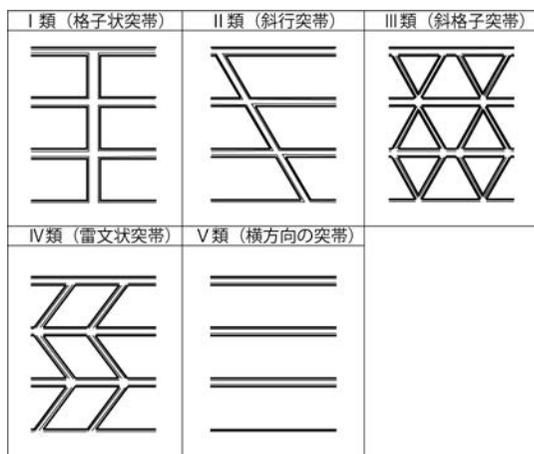


1：長法寺南原東3号墳 2：ヒル塚古墳 3：狐谷横穴群 4：金比羅山古墳 5：西山古墳群  
6：内田山B1号墳 7：瓦谷遺跡

第1図 山城地域における円筒棺出土古墳

域間交流や円筒棺の出現背景などが  
検討されている。<sup>(註10)</sup>

これまでの円筒棺の研究では、円筒棺の系譜や、被葬者の性格、埴輪棺や円筒棺の展開などが検討されてきた。特に被葬者の性格や同様の材質で製作される埴輪棺と円筒棺、陶棺の関係性について多くの研究が行われてきた。一方で、円筒棺自体の技法の特徴や形態の特徴の詳細な分析が行われておらず、円筒棺が埴輪



第2図 棺身の分類

棺と類似している点からも埴輪製作集団が製作を担っていたと想定されることや、土師伝承地周辺に出土することが多く、後の土師氏と呼ばれる集団との関連性が検討されることが多かった。そこで本論では、資料で詳細に観察し、比較することのできた山城地域を中心に、各資料の技法・形態の特徴等を分析し、円筒棺の製作集団について考察していく。

### 3. 分析

#### (1) 技法・形態的分類

研究史で取りあげたように橋本が棺身の形態的分類を行っており、突帯配置をもとにⅠ～Ⅵ類に分類している。Ⅰ類(格子状突帯)は横方向の突帯に加えて、直交するように突帯を貼り付けるもの、Ⅱ類(斜行突帯)は横方向の突帯に加えて、同一方向に斜め方向の突帯を貼り付ける。Ⅲ類(斜格子状突帯)は、横方向の突帯に加えて、斜め方向の突帯を貼り付け、格子状になるように配置する。Ⅳ類(雷文状突帯)は、突帯の間で、それぞれ逆の斜方向の突帯を走らせて、全体として綾杉文を構成している。Ⅴ類は横方向の突帯のみのものであり、6つに分類されている(第2図)。

本論の対象としている山城地域においては棺身の突帯配置が橋本博文の分類から外れる資料が出土していない点からこれらの分類を利用しつつ、棺身と蓋の形状などの形態の特徴や技法の特徴などを概観していく。

これまでの発掘調査によって山城地域では、7遺跡(城陽市西山古墳群、宇治市金比羅山古墳、八幡市ヒル塚古墳、同市狐谷横穴群、木津川市内田山B1号墳、同市瓦谷遺跡、長岡京市長法寺南原東3号墳)から確認されている。

棺身(第4・5図)

I類は内田山B1号墳や西山古墳群出土の円筒棺が該当する。内田山B1号墳の資料は、横方向の突帯とほぼ同じ幅のものを縦方向に貼り付ける。外面にはヨコハケを施し、内面にはヨコハケ、ユビオサエ、ナデを施す。一部には、ヨコハケの静止痕を確認できる。西山古墳群のものについては、縦方向の突帯が横方向の突帯に対して、2倍以上の幅のものを貼り付ける。外面には、ヨコハケとタテハケを施している。接合痕から、横方向の突帯貼り付け後に、縦方向の突帯を貼り付けている。

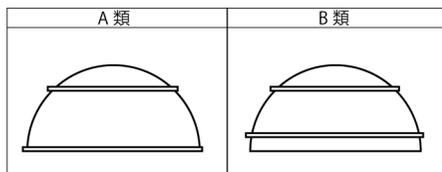
IV類については、金比羅山古墳の資料が該当する。横方向の突帯貼り付け後、斜方向の突帯を貼り付ける。外面にはヨコハケを施し、内面には、ヨコハケ、ナナメハケ、ユビオサエを確認できる。ナナメハケは内面中央部で右上がりから左上がりへ変化する。

V類については山城地域でも最も多く確認できるもので、長法寺南原東3号墳や狐谷横穴群、瓦谷遺跡、ヒル塚古墳<sup>(註11)</sup>にて確認できる。瓦谷遺跡や狐谷横穴群の資料は、最上段の突帯がほかの突帯に比べて、高く貼り付けられている。棺蓋と接触するように製作されている。長法寺南原東3号墳の資料は外面にタテハケ、ヨコハケを施し、内面にヨコハケ、ナナメハケを施す。狐谷横穴群の資料は外面にタテハケ、ヨコハケを施し、内面にユビオサエを施す。瓦谷遺跡の資料は2つの円筒棺を合わせて使用されており、片方には、透孔も穿たれている。外面にヨコハケを施し、一部で、B種ヨコハケで、静止痕を確認できる。内面にはナナメハケ、ユビオサエを施す。同様の形態のものが近隣の埴輪窯でも確認されている。ヒル塚古墳の資料は古墳樹立の普通円筒埴輪と同一の製作技法を用いながら、透孔を穿たず、棺専用で作成した資料である。外面にタテハケ、C種ヨコハケを施す。内面にタテハケ、ユビオサエ、ナデを施す。山城地域の遺跡ではII・III類を認められない。

棺蓋(第4・5図)

棺蓋分類については、半球形で、下部端部に突帯を貼り付けるもの(蓋A類)と貼り付けないもの(蓋B類)が確認でき(第3図)、さらに数条の突帯を貼り付けるものが認められる。

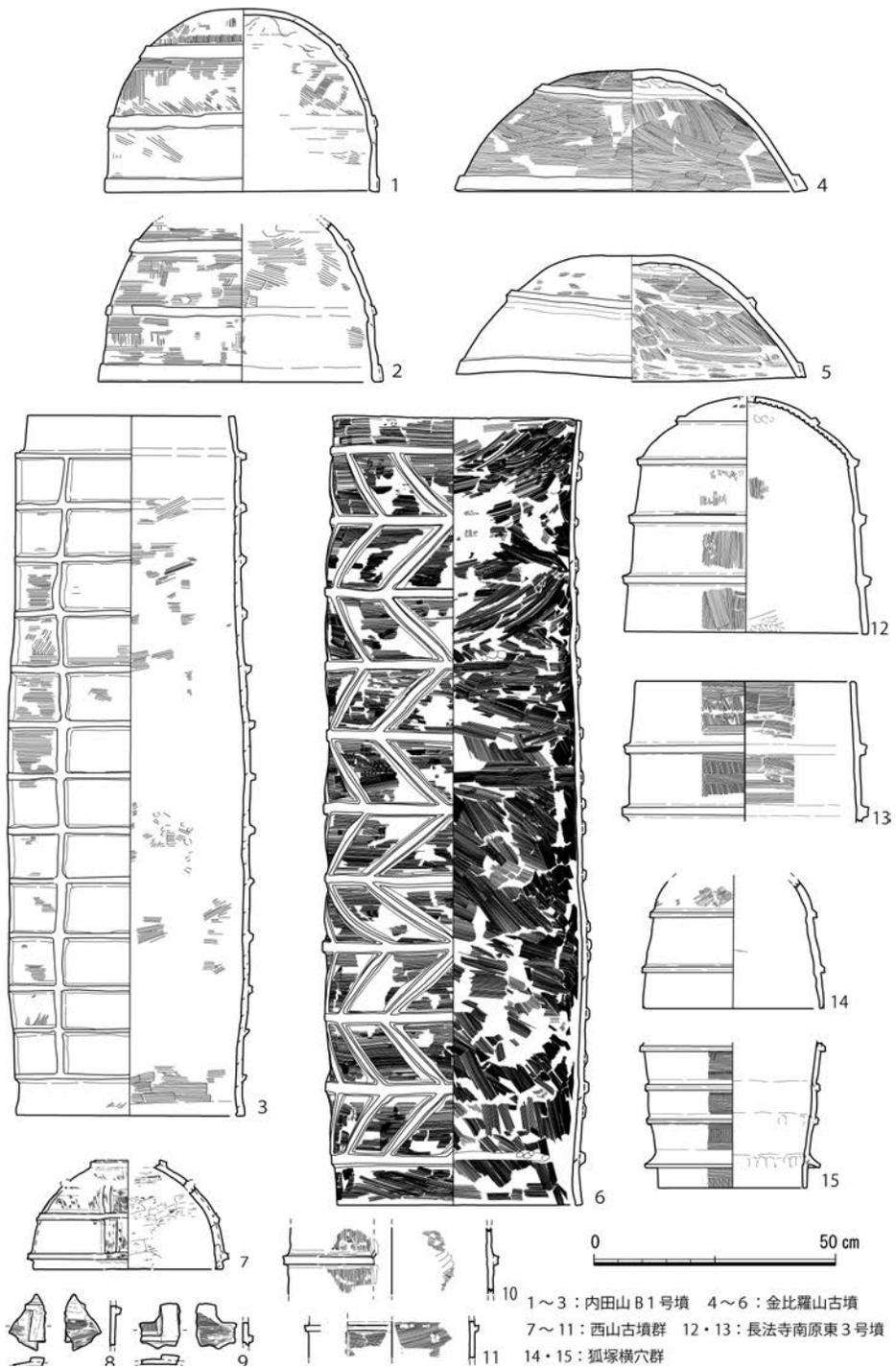
A類で、1条の突帯のみ貼り付ける資料が瓦谷遺跡で確認でき、2条の突帯を貼り付ける資料が金比羅山古墳から出土し、3条の突帯を貼り付ける資料が内田山B1号墳で認め



第3図 棺蓋の分類

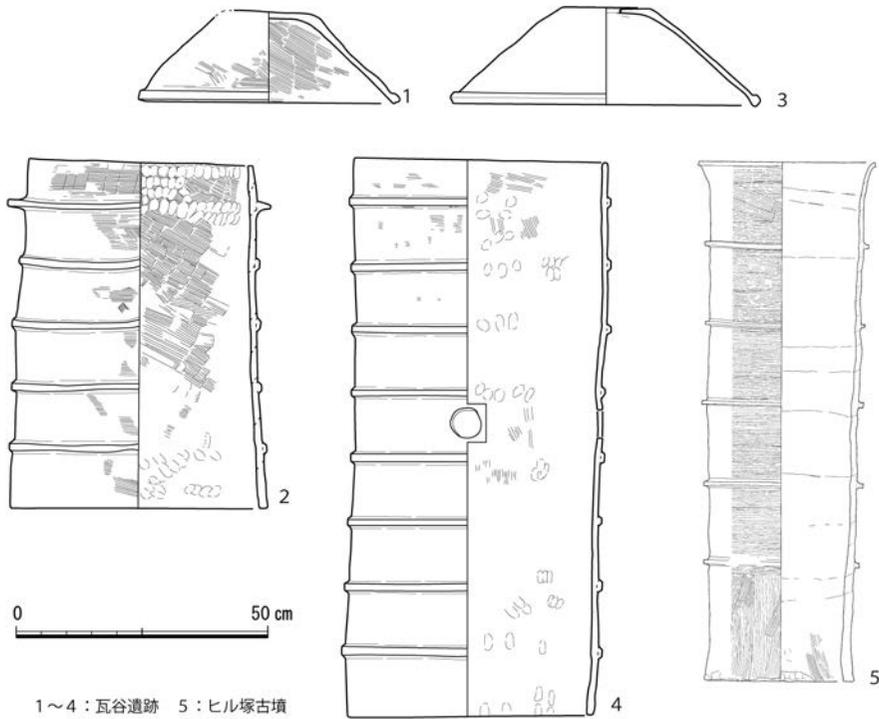
られる。ともに外面調整にはヨコハケを施し、内面調整には、ヨコハケ、ナナメハケ、ナデを確認できる。

B類で、2条以上の突帯を貼り付ける資料が狐谷横穴群で確認でき、4条の突帯を貼り



1～3：内田山B1号墳 4～6：金比羅山古墳  
 7～11：西山古墳群 12・13：長法寺南原東3号墳  
 14・15：狐塚横穴群

第4図 山城地域における円筒棺 1



第5図 山城地域における円筒棺2

付ける資料が長法寺南原東3号墳、西山古墳群で出土している。西山古墳群出土資料は横方向の突帯に加えて、縦方向の突帯が貼り付けられ、棺身と同様の突帯配置を用いる。多くの資料で、外面にヨコハケ、ナナメハケを施しているが、狐谷横穴群出土資料については、タタキを確認できる。内面についてはナナメハケやユビオサエ、ナデを施すが、西山古墳群出土資料については、ケズリを施す。

以上、7遺跡の棺身と蓋の資料を挙げた。多くの資料で、外面にハケ調整を施すなど共通点を確認できたが、多様な突帯配置や細部の内外面調整に差異が認められ、棺蓋については同一の突帯配置のものは確認できない。

(2)山城地域出土円筒棺の埋葬時期と埋葬位置について

ここでは、各円筒棺の埋葬時期と埋葬位置について概観する。円筒棺によって編年を組むことが困難なため副葬品や主体部に埋葬されているものは、古墳築造と同時期に埋葬したと考え、変遷を検討する。

ヒル塚古墳出土の資料については、第3主体部に使用されている。樹立の円筒埴輪と外面調整、底部高や突帯間隔など、多くの特徴が一致する。円筒埴輪の時期は川西編年Ⅱ期<sup>(注12)</sup>に該当し、古墳築造も古墳時代前期後半に位置づけられる。

金比羅山古墳出土のものについては、第2主体部に使用された。円筒棺には管玉が17点、棺外からは鉄製農具30点などが副葬されており、古墳時代中期前葉と考えられる。また、古墳樹立の埴輪についても川西編年Ⅲ期のものであり、副葬品の時期とも合致する。

西山古墳群出土のものについては、出土位置も曖昧であり、不明な点が多いが、概報にて、円筒棺が前方部の北東裾にて出土したとする記載がある。ともに保管されていた円筒埴輪片を同時期のものと想定するならば、川西編年Ⅲ期のものと想定でき、古墳時代中期前半の可能性<sup>(注15)</sup>がある。

内田山B1号墳は主体部で使用されている。円筒棺に玉類が約180点副葬されていたが、時期の決定することができない。ともに墳丘平坦面から出土した埴輪棺が、大型の円筒埴輪を転用したもので、貼付口縁をもつ点から川西編年Ⅲ期から川西編年Ⅳ期のものに位置づけられ、古墳時代中期前半に該当する。

瓦谷遺跡の円筒棺は瓦谷古墳群の立地する丘陵と谷を挟んだ対岸に1基だけ単独で埋葬されていた。刀子1点と付近から鉄鏃が3点出土している。時期の確定が難しいが、瓦谷遺跡のその他の埴輪棺が川西編年Ⅱ期からⅣ期のものであり、埴輪窯から同様の形態のものが出土している点から川西編年Ⅳ期、古墳時代中期前葉から中葉にかけてのものと考えられる。

そのほか、長法寺南原東3号墳は原位置を保っておらず、付近の転用埴輪棺と並行する埋葬施設が存在していた可能性も考えられている。狐谷横穴群は表土中に散乱した状態で出土しており、ともに時期を確定できる資料ではなく、不明である。

#### 4. 考察

ここまで、山城地域で確認できる円筒棺について製作技法、埋葬時期、埋葬位置について分析してきた。それらの分析をもとに山城地域における円筒棺の製作集団の遷移について考察していく。

##### (1) 製作集団について

本論において円筒棺の製作の特徴から大きく3つの製作集団の特徴が想定できる。

1つ目は円筒埴輪と同一の技法的特徴や形態的特徴をもつ円筒棺を製作するものである。専用棺として作られているが、古墳樹立の円筒埴輪製作集団と同一の集団である。

2つ目は、製作技法に円筒埴輪製作技法を転用しながら、円筒埴輪とは異なるものとして製作する集団である。外面調整にハケ調整、内面にナデ調整やハケ調整を施す資料が該当し、瓦谷遺跡出土資料のように外面調整にヨコハケの静止痕が確認できるものもあり、同時期の円筒埴輪の技法を熟知している集団となる。

3つ目は基本的に円筒埴輪製作の技法を転用しながら、西山古墳群や長法寺南原東3号墳など部分的に同時期の円筒埴輪には使用されないケズリやタタキなど技法を施す集団である。

上記のように製作集団の製作技法の差異から3つに分類することができた。これらの製作集団の特徴について、1つ目の同一の集団以外は、円筒埴輪製作を理解している点で、同一の傾向をもつ製作集団ではあるが、細部の技法的特徴と形態的特徴からは、同一の製作集団とは認められず、古墳ごとに導入されたものであり、他地域からの直接的な影響が想定できる。近年、再報告された金比羅山古墳では、類似した突帯配置のものが大和地域北部に多く確認される。出土した副葬品<sup>(注16)</sup>については、大和地域とのつながりの強さが指摘されている。もちろん副葬品とは異なり、周辺で円筒棺が古墳の周辺で製作されたものであるが、その製作に大和地域からの影響が想定できる。

## (2)製作集団の遷移

上記のように製作集団の特徴について大きく3つに分類することができた。これらの製作集団は、古墳時代前期後半に埴輪を転用する埴輪棺ではなく、専用棺として円筒棺が製作を開始する。初源的な円筒棺は、円筒埴輪に類似性が高く、埴輪を転用したものと大きく変わらない。一方、中期前葉になると、埴輪とは異なる形態的特徴が確認できるようになる。これらの製作集団の特徴には、従来のように埴輪製作技法を転用しながら製作する集団と異なる技法を加える集団に分かれていく。さらに中期中葉以降になると円筒棺自体の製作が少なくなり、製作されなくなっていくものと考えられる。

このように円筒棺は埴輪棺からの派生し、中期に専用棺として形も異なるものへと変化する。しかし、基本的には、埴輪製作技術を用い、一部には、新たな技術を加えながら製作していく過程を読み解くことができる。

## 5. まとめ

ここまで山城地域出土の円筒棺について検討してきた。山城地域については円筒棺が古墳時代前期後半に出現し、中期に他地域と同様に増加し、特に中期前半に多く製作されるようになる。技法的特徴と形態的特徴からは、地域的なまとまりは認められなかった。特に突帯配置は多様であり、棺蓋については個々で異なるものであった。また、製作集団の特徴について大きく3つに分類でき、製作集団の変化の過程を読み取ることができた。

本論では、円筒棺の細部に着目して、分析を行い、製作技法を中心に製作集団や円筒棺が山城地域の展開と導入を検討した。類似する埴輪棺についてふれることができなかった。円筒棺は埴輪製作集団が大きく関与しており、同様の埴輪棺を含めた上で、山城地におけ

る埴輪棺・円筒棺の位置づけを検討することを今後の課題としたい。

(きたやま・だいき=京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

- 注1 本報告では、棺身を棺専用として製作した埴製の特製棺を「円筒棺」、樹立埴輪や同等の埴輪を棺としたものを「埴輪棺」と呼称する。
- 注2 上原準一1921「特殊なる型式の甕棺を発見したる讃岐国香川郡円座村山崎の古墳に就いて」『考古学雑誌』11-6 日本考古学会 pp.315-324
- 注3 梅原末治1923「銅剣銅鉾に就いて(三)」『史林』史学研究会第8巻第3号 pp.427-433
- 注4 後藤守一・久永春男1957「岩場古墳」『吉良町史料』第1輯 吉良町
- 注5 間壁忠彦「円筒棺」『瀬戸内考古学』第3号 瀬戸内考古学会)1958
- 注6 伊達宗泰「奈良県なら山第3・4号墳」(『奈良県文化財調査報告書』第5集 奈良県教育委員会)1962
- 注7 橋本博文1980「円筒棺と埴輪棺」『古代探叢』早稲田大学出版部1980 pp.279-316
- 注8 坂靖1994「古墳時代の「従属葬」をめぐって」『同支社大学考古学シリーズ』VI 同支社大学考古学シリーズ刊行会 pp.393-411、田中涼子1996「円筒棺にみる階層性」『古事：天理大学考古学研究室紀要』第1冊 天理大学考古学研究室 pp.25-34、有井広幸1996「瓦谷遺跡群における埴輪棺の展開について」『京都府埋蔵文化財論集』第3集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター pp. 181-188
- 注9 川口修実2000「畿内における埴輪棺の展開について一試論」『古代学研究』第149号 古代学研究会 pp. 1-22
- 注10 宮村誠二2018「近江の埴輪棺墓と地域間交流」『紀要』第31号(公財)滋賀県文化財保護協会 pp.15-22、川口修実2020「近畿における埴輪棺の諸問題」『月刊考古学ジャーナル』No.741 pp.15-18
- 注11 ヒル塚古墳出土の円筒棺は、これまでの研究で円筒棺の初源的な位置づけとされ、埴輪棺として扱う論文もあるが、本論の分類では、棺専用として製作されているため円筒棺として扱う。
- 注12 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 日本考古学会 pp.1-70
- 注13 京都府教育委員会2021『金毘羅山古墳発掘調査報告書』
- 注14 同志社大学考古学研究会1962「山城久津川古墳群の研究」『同志社考古』第2号 同志社大学考古学研究会
- 注15 桐井理揮・北山大熙・菊池望・繰納民之2020「西山1・2号墳出土遺物の再検討」『同志社大学歴史資料館報』第23号 同志社大学歴史資料館 pp. 1-30
- 注16 犬木努2019「宇治市金比羅山古墳出土の円筒棺について」『山城郷土資料館報』第26号 京都府立山城郷土資料館 pp.57-62
- 注17 前掲注13

【図の出典】

- 第4図 1～3：筒井崇史2000「内田山遺跡・内田山B 1号墳」『京都府遺跡調査概報』第95集  
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、4～6：松尾史子2019「宇治市金毘羅山古墳出土  
円筒棺の修理復元について」『山城郷土資料館報』第26号 京都府立山城郷土資料館、犬木  
努2019「宇治市金毘羅山古墳出土の円筒棺について」『山城郷土資料館報』第26号 京都府立  
山城郷土資料館、7～11：桐井理揮・北山大熙・菊池望・繰納民之2020「西山1・2号墳出  
土遺物の再検討」『同志社大学歴史資料館報』第23号 同志社大学歴史資料館、12・13：長岡  
京市教育委員会・大阪大学南原古墳調査団1992『長法寺南原古墳の研究』(長岡京市文化財用  
差報告書第30冊・大阪大学文学部考古学研究報告2)、14・15：久保田健士1983「狐谷横穴  
群発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第8集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 第5図 1～4：石井清司・有井広幸・伊賀高弘・筒井崇史・森島康雄1997『瓦谷古墳群』(財)京  
都府埋蔵文化財調査研究センター、5：北山大熙2017「埴輪からみた八幡市ヒル塚古墳」『畿  
内の首長墓』立命館大学文学部